

英語教育史の授業から学生が得る「学び」についての一考察*

英語学習の目的意識向上を目指して

林田 朋子**

A Study of What Students Obtain from an English Language Teaching History Class
Aiming to Improve Students' Sense of Purpose in Learning English

Tomoko HAYASHIDA**

はじめに

大学で英語を学ぶ学生の中には学習目的が明確でないまま、「必修科目だから」「単位取得のため」など、受動的な理由で英語学習に取り組んでいる学生も少なくない。このような学生は英語学習動機が低く、動機づけも充分でない傾向にある。廣森 (2015: 88) によれば、「動機」とは「ある行動の目標や目的」であり方向性を定めるものであり、「動機づけ」とは「ある行動の目標や目的の強さ…を規定する」ものであるとしている。つまり、学習者がいくら英語学習の「動機」を持っていたとしても、「動機づけ」が無ければ外国語習得に必要な学習を継続することは難しい。そのため動機づけを高めようと様々な教授法や教材の工夫が行われているが、英語を社会生活上必須としない日本の外国語学習環境 (English as a Foreign Language: EFL) の下では、持続的に動機づけを維持することは難しい。では、教授法や教材を工夫すること以外に大学生の英語学習の動機づけを高める方法はないのだろうか。この点について、「動機」の源泉である英語学習の目的意識そのものを高める手立てとして、日本の英語教育史の授業を行ってはどうかと考えた。歴史を遡れば、日本人の英語学習目的はその時代の社会情勢によって大きく揺れ動いてきた経緯がある。「日本人はなぜ英語学習を始めたのか」、「日本人の英語学習目的はどのように変化してきたのか」とい

う問いを考えることは、「なぜ自分は英語を学んでいるのか」という自己の英語学習目的に真剣に向き合う機会となるのではないだろうか。そこで本研究では、英語を学んでいる大学1年生を対象に日本の英語教育史の授業を行い、学生にどのような学びがあるのか、また英語学習目的意識の向上にどのような影響を与えるのかについての予備的調査を行った。論文の構成は次のとおりである。第1章では、研究方法について述べる。第2章では、選択式アンケートの結果について述べる。第3章では、自由記述式アンケートの結果について述べる。第4章では、アンケートの結果について考察する。第5章はまとめである。

1. 研究方法

1.1 調査方法

本研究では、2022年度後期に鎮西学院大学現代社会学部で開講された「日本研究」¹を履修した日本人大学生 (1年生) 33名を調査対象とした²。調査方法として、Googleフォームによる選択式アンケートと毎授業後に実施した自由記述式アンケート (全3回) を用いた。自由記述アンケートについては、テキストマイニングのソフトウェアであるKH coderを用いてできるだけ客観的に全体の傾向をとらえる手法を用いた。テキストマイニングとは、樋口耕一氏が開発したKH coderという日本語テキスト型データ分析ツールである³。

¹ 2022年度の「日本研究」では、『日本らしさ』、『日本独特』という軸で、身近なテーマをとりあげ多角的に日本の教育や言葉、生活、社会の諸相を学ぶことを目的とし、オムニバス形式で実施された。筆者は第4回から6回までの全3回を担当した。

² 授業履修者は66名 (2022年11月時点) であったが、そのうち小学校から高等学校まで日本の公教育で英語を学習した日本人学生を対象とした。

³ 樋口耕一、KH Coder Index Page (2022年12月5日取得)

* Received December 16, 2022

** 鎮西学院大学 現代社会学部 外国語学科 Faculty of Contemporary Social Studies Foreign Language Department, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

KH coderでは、テキスト型データ分析の恣意性をできるだけ排除し客観性を確保することができるとされている。これらのアンケート結果を分析することで、授業を履修した学生にどのような学びがあったのか、特に英語学習目的意識に焦点をあて全体的な傾向を捉えることを試みた。

1.2 授業概要

授業の目的は、日本の英語教育史を目的論の観点から概観することで、学生が自己の英語学習体験や知識を日本史というより広い視野で捉えなおし、自らの学習目的を再構築することを促すことである。授業ではパワーポイントを使用し、英語教育の歴史的背景を理解しやすくするため短い動画なども視聴した。また、より主体的な学びとなるよう、思考を促す質問を学生に問いかけ、ペアやグループで話し合う機会を設けながら授業を進めた。授業履修者66名のうち33名は日本語を母語としない留学生であったため、ペア・グループワークでは日本人と留学生の交流が行われるよう促した。

本授業では、全3回（90分間／回）という時間的制約のもと、日本の英語教育史の全体像を時系列で提示する必要があった。そのため、英語教育

史の中でも学習目的に関係する重要事項に焦点を置き簡潔に流れを整理した。3回の授業は表1のような展開を採用し、内容に関しては英語教育史についての重要な研究である井村（2003）と斎藤（2007）を主な先行研究として参照した。ここでは3回の授業内容を簡単に記載するとともに、目的論に着目したより詳細な日本の英語教育史については別稿に譲りたい。表1は全3回の授業概要を示している。まず第1回目は、日本人が英語学習を始めたきっかけを鎖国の終焉という歴史的転換点の中で捉え、日本の英語教育が本学の所在地である長崎を拠点として始まったことを紹介した。郷土史との接点に目を向けさせることで、学生の既存の知識を喚起することを目指した。第2回目は、明治初期の日本で西洋文化の受容という社会の要請が生じ、より実利的な目的が英語学習の起点となった点に着目した。明治初期で用いられた外国人教師による外国語で生物・科学などを学ぶ「直接法」という教授法についても触れた。第3回目は、戦前と戦後の日本の英語学習状況の変化を知るとともに、英語教育が大衆化されるにしたがって、その目的が実用論と教養論に二分化されてきた背景について講義し、実用論と教養論の対立について学生自身の批判的思考を促した。

表1 授業の概要 [全3回（15回授業）]

授業回	タイトル	概要
第4回	鎖国と英語	日本人が初めて英語に出会い 英語学習に着手することになった経緯と、未知の言語に近かった英語を誰がどのようにして学んだのかについて講義を行った。特に、学習者の居住地である長崎に英語学習の原点があることから、郷土史との接点に着目した。1808年のフェートン号事件をきっかけとした国防の観点から、オランダ通詞を中心として英語学習が始まった。オランダ語を媒介とした英語学習や、初期の辞書や文法書などの特徴に触れた。また、ラナルド・マクドナルドなど、当時の英語母語話者が日本人学習者の特徴をどのように捉えていたのかを紹介した。
第5回	文明開化と英語学習	西洋文明を取り入れる手段としての英語学習が急速に必要とされるようになった明治初期から、国家主義の高まりにより英語教育廃止論が提唱されるようになった大正時代について概観した。ここでは、学習目的の変化に伴い英語教授法にも変化があったことに着目した。文明開化期における急速な西欧文化の受容と英学としての英語学習の関係について考え、福沢諭吉を代表とする明治期の英学者の存在と翻訳文化の発展、当時の英語教授法が直接法から間接法へと変化した経緯を講義した。
第6回	国際化と英語教育	戦前と戦後の日本の英語教育を比較しながら、英語学習の目的意識の変遷を辿った。英語学習の大衆化に伴い生じた英語教育の必要性に対する否定的な意見や、実用論と教養論との対立などの背景を探った。授業の後半では、高度成長期を経て日本が名実ともに経済大国へと成長をとげる中で繰り広げられた、英語教育に関する「平泉・渡辺論争」と、近年のコミュニケーション重視の傾向にある日本の英語教育事情について触れた。

2. 選択式アンケートの結果と考察

ここでは、全3回の授業終了後に行った選択式アンケート調査の結果を考察し、学生が英語教育史の授業を学習動機や学習目的の観点からどのように捉えたのかについての全体像を把握する。未提出者と欠席者がいたため、アンケートの有効回答数は23であった。まず、「日本の英語教育史について知っていましたか？」という質問に対しては、全く知らなかった（7名）、あまり知らなかった（11名）、少し知っていた（2名）、まあまあ知っていた（2名）、よく知っていた（1名）と回答した。このことから、半数以上は日本の英語教育史についての知識がほぼない状態であったか、全くない状態であったことがわかる。次に、「英語教育史について学ぶことは、英語（外国語）学習に役立つと思いますか？」という質問に対しては、少しそう思う（3名）、まあまあそう思う（13名）、非常にそう思う（7名）であり、「全くそう思わない」「そう思わない」と回答した学生はいなかった。有効回答者のほぼ全員が英語教育史を学ぶことが自己の英語学習にある程度は役立つと感じたことが示されている。また、「今回の授業を受けて、自分の英語学習目的や動機について考えましたか？」という質問に対しては、少し考えた（10名）、まあまあ考えた（9名）、とてもよく考えた（4名）であり、「全く考えなかった」「あまり考えなかった」と回答した学生はいなかった。これは、英語教育史を学ぶことは、自己の英語学習目的や動機について考えるきっかけとなったことを示唆していると言えよう。一方で、「5. 今回の授業を受けて、自分の英語学習の目的・動機に変化はありましたか？」という質問に対しては、あまりなかった（7名）、少しあった（10名）、まあまああった（3名）、非常にあった（3名）であり、3割の学生にとっては自己の学習目的や動機にはあまり変化がなかったと感じていることが明らかになった。しかし、7割の学生が自己の動機付けに一定の変化があったと回答していることは注目に値する。どのような点に影響があったかについては、自由記述の内容から詳細を考察する。

以上の結果から、本授業を受けた学生は、授業以前では英語教育史についての知識がほぼない状

態であったか、全く知らない状態であったことがわかる。また、授業後にはほぼ全員が英語教育史を学ぶことが自己の英語学習にある程度は役立つと感じており、英語教育史を学ぶことが自己の英語学習目的や動機について考えるきっかけとなったと感じていることが示された。もちろん、調査対象人数が少ないことなどから一般化することはできないが、英語教育史の授業が英語学習目的に一定の好ましい影響をあたえる可能性がある点を示唆するものであると言えよう。以下では、本授業を受けた学生にどのような学びがあったのかについての詳細を検討する。

3. 自由記述式アンケート結果と考察

本章では、学生の学びを具体的に把握するために行った自由記述式アンケートの結果について述べる。アンケート文は「授業への質問・感想などを自由に書いてください」（以下、「質問・感想」と記す）と「自分で調べてみたいと思ったこと」（以下、「調べたいこと」と記す）の2点であった。分析にはテキスト型データ分析ツールであるKH Coder（Ver3.Beta.06d）を用いた。アンケートの記述文をWordに入力⁴しKH coderに読み込ませた後、頻出語の抽出、共起ネットワークの抽出という手順で分析した。自由記述式アンケートを分析することで、授業を履修した学生にどのような学びがあったのか、また英語学習の目的意識にどのような影響があったのかについての詳細と全体的な傾向を捉えたい。

3.1 頻出語の抽出

3.1.1 「質問・感想」の頻出語

まず、「質問・感想」についての自由記述から得られたデータを分析する。KH coderを用いて前処理を行い、文章の集計を行った結果68段落、108の文が確認された。また、総抽出語数⁵は3516語、異なり語数⁶は540語であった。これらの頻出語のうち上位50語とその出現頻度を表2に示した。上位3位の頻出語は「英語」（98回）、「思う」（46回）、「学習」（33回）であった。KWICコンコーダンスを使って「英語」についての語の使用方法をみると、「私は小学校から英語学習を義務教育で受けてきたが、なぜ自分が英語を勉強している

⁴ 誤字脱字の修正、ひらがな表記の統一化などのデータクリーニングを行った。

⁵ 「分析対象ファイルにふくまれているすべての語の延べ数」（樋口、2022：33）

⁶ 「何種類の語がふくまれているかを示す数」（樋口、2022：33）

のかを考えたことが無かった」や、「日本で最初に英語学習を始めた人は、どのように学習したのか不思議だったけど、オランダ語を間に挟みながら学習していたことを知って面白かった」など、自己の学習について振り返り、また授業で知った当時の日本人の英語学習方法に言及する記述が見られた。「思う」については、「自分が小学校のころから何気なく学んでいた英語も、理由があって学んでいるのだと思った」や、「なんとなく学習していた英語がこのような深い歴史があるとは思

わなかった」など、授業の中で新しく知り得た事実と、自分の経験とを照らし合わせるような表現が観察された。また、「学習」については、「昔はゼロの状態からの外国語学習だったのでいいなと思った」や「時代のニーズに応じた学習言語や学習方法があったことは、今でも同じことがいえると思う」など、学習方法に言及した記述も見られた。その他、「学ぶ」「教育」「日本」「今」「外国語」「知る」などが出現回数20回以上の抽出語であった。

表2 「質問・感想」について抽出された頻出語（上位50語）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
英語	98	昔	11	関係	4
思う	46	変化	10	興味深い	4
学習	33	必要	9	交流	4
学ぶ	30	オランダ	8	今回	4
教育	26	言語	8	使う	4
日本	26	国	8	取り入れる	4
今	21	人	8	習得	4
外国	20	コミュニケーション	7	出来事	4
知る	20	直接	7	小学校	4
勉強	16	明治	7	調べる	4
時代	15	廃止	6	通詞	4
日本人	14	教授	5	聞く	4
自分	13	始める	5	貿易	4
授業	13	戦争	5	面白い	4
感じる	12	目的	5	理解	4
歴史	12	違う	4	良い	4
考える	11	影響	4		

3.1.2 「調べてみたいこと」の頻出語

次に、「調べてみたいこと」についての自由記述から得られたデータの頻出語を分析する。KH coderを用いて前処理を行い文章の集計を行った結果65段落、101の文が確認された。また、総抽出語数は2638語、異なり語数は445語であった。質問に使用された一般的な語である「調べる」は除外したため、分析に使用される語として2594語が抽出された。これらの頻出語のうち上位50語とその出現頻度を表3に示した。上位3位の頻出語は「英語」(43回)、「思う」(36回)、「知る」(23回)であった。KWICコンコーダンスを使って「英語」についての語の使用方法をみると、「実用英語に賛成だった人、教養英語に賛成だった人、それぞれのくらの人数がいたのか知りたいです」

や、「ネパールやこの学校の留学生は英語が話せる人が多いけど、どんな英語教育を受けていたのかがとても気になりました」など、英語学習目的の違いや他国での英語教育の状況に興味を示していることが窺えた。「思う」については、「ポルトガル語由来の言葉や英語オランダ語日本語の訳された方などをもっと調べてみたいと思った」「英語をローマ字読みしてしまう気持ちが私にもわかるので昔の方もそのような気持ちだったのだろうなと思いました」など、英語以外の外国語が現在の日本語に与えている影響や、英語の発音方法についてなど、より言語学的な要素に意識が向けられていることがわかる。「知る」については、「英単語の発音をカタカナで表記しているところもオランダ語の発音の影響を受けていると知り、もっ

とどのように当時の辞書に記されていたのかが気になった」や、「ラナルド・マクドナルドさんについて詳しく知りたいと今回学んで思うことができました」など、英単語の発音表記方法や、長崎

で英語教育に携わった歴史的人物に興味関心がわいたことが観察された。その他、「オランダ」「外国」「日本」「気」「学習」などが10回以上の頻度で抽出された語である。

表3 「調べたいこと」について抽出された頻出語（上位50語）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
英語	43	学ぶ	6	今回	4
思う	36	教授	6	時代	4
知る	23	直接	6	詳しい	4
オランダ	18	変化	6	世界	4
外国	18	勉強	6	伝わる	4
日本	17	貿易	6	文明開化	4
気	16	国	5	由来	4
学習	13	昔	5	コミュニケーション	3
教育	12	他	5	コミュニケーション	3
人	11	アプローチ	4	ラナルド	3
日本語	10	カタカナ	4	違う	3
授業	9	間接	4	関節	3
通詞	9	教師	4	教養	3
日本人	9	興味	4	見る	3
言葉	7	言う	4	考える	3
文化	7	言語	4	行く	3
マクドナルド	6	行う	4		

3.2 共起ネットワーク

KH Coder の「共起ネットワーク」のコマンドを使用し、「質問・感想」「調べてみたいこと」の記述中で、共起の程度が強い語を線で結んだネットワークを描いた（図1・図2）。樋口他（2022）によれば、共起ネットワークを作成することで、データ中に出現した語の種類や語と語のつながりなどの情報を可視化することができ、データが示す話題の概要を捉えることができるとされている。なお、分析にあたっては、出現数による語の取舍選択に関しては、前者の最小出現数を「3」後者を「4」に設定し、描画する共起関係の絞り込みにおいてはどちらも描画数を「60」に設定した。図1及び図2では、語の共起関係が強いほど線は太く、語の出現数が多いほど円は大きく描かれている。

3.2.1 「感想・質問」の共起ネットワーク

以下では、図1に示した「質問・感想」の共起ネットワークに示された特徴的なまとまりを取り上げ、そこに示された記述を分析する。なお、共

起ネットワークに現れたそれぞれの語の文脈を探るため、KH coderのKWICコンコーダンスを用い、具体的な記述内容を文脈の中で解釈する。下線部は共起ネットワークに示されている語を表している。図1が示すように、大きく分けると8つのカテゴリーが観察できる。これらは「①日本史と学習」「②英語教育」「③教授法の変化」「④今と昔の言語学習」「⑤英語の必要性」「⑥オランダ通詞」「⑦国際交流」「⑧明治期」の8つのテーマに分類することができる。

「①日本史と学習」では、「学習」「日本」「授業」「歴史」「知る」のキーワードが観察された。記述例としては、「日本で最初に英語学習を始めた人は、どのように学習したのか不思議だったけど、オランダ語を間に挟みながら学習していたことを知って面白かった。」「日本史の流れから日本人が英語学習をする目的やきっかけを知ることができた。授業からなぜ日本が英語を学ばないといけな

た、「今まで日本史を言語（教育）も交えながら考えたことがなかったのでとても面白く感じました」、「今までなんで英語を勉強しているのかや英語学習の始まりについて考えたことが無かったので勉強になった」、などが見られた。これらの記述から、学生が歴史的な視点で英語学習の目的を考えるという新たな発見をしたことを読み取ることができる。「②英語教育」のカテゴリーでは、「英語」「思う」「教育」「学ぶ」「日本人」などのキーワードが観察された。具体例としては「日本がどのような流れで英語教育を取り入れてきたのかを学ぶことができました。そして文明開化で昔から日本人は教育に熱心であると感じました」、「英語を学び西洋文化を取り入れようとしたかと思えば、英語教育廃止論が出てきたりと、日本人は単純で影響を受けやすいと感じた」、「英語教育がこんなにも紆余曲折していたとは知らなかったの、政治状況がどれほど学問に影響があるのか身に染みてわかった。もしイマージョン教育が今も残っていたら日本人の英語は今より良かったのかと思う」などがあげられる。個人としての英語学習というよりはむしろ、自己が属する集団としての「日本人」を客観視し英語教育という枠組みに視線を向けていることが読み取れる。「③教授法の変化」については、「時代」「感じる」「変化」「目的」「教授」「直接」などのキーワードが含まれている。記述の中では、「16～19世紀の日本では、学ぶ言語が目的によって変化していたことを知った。」「英語教授法が時代によって直接法から間接法へと変化したことを知りました。教授法が変わると対応することもすごく大変だろうなと感じました」「英語学習や教授法が時代によって大きく変化している様子がとても興味深かった」と記され、目的の変化に伴い教授法も変化していったという点に興味を抱いている様子が見て取れる。「④今と昔の言語学習」のカテゴリーでは、「今」「昔」「外国」「言語」「人」「小学校」がキーワードとなっている。「昔の人たちの地道で大変な作業のおかげで、今私たちは外国語を学ぶことができるのだと実感しました」、「昔は今とは異なり全く知らない言語を一から自分たちで勉強していたのでとてもすごいと思いました。しかし、それには発音などの問題が生じていたので、外国人に伝えるのは難しかったと思います」「昔はゼロの状態からの外国語学習だったのですすごいなと思った」、「今のようにインターネットや本などが全くない限られた情報源の中で一から言語を学習する

ことはとても難しかっただろうと思う」など、英語学習環境が今ほど恵まれていなかった当時の人々の努力に感銘を受けている様子が読み取れる。「⑤英語の必要性」については、「必要」「コミュニケーション」「貿易」「始める」がキーワードとなり、「⑦国際交流」とは共起関係は無いが内容に類似性が見られる。具体的には、「なんとなく学習していた英語がこのような深い歴史があるとは思わなかった。とくにフェートン号事件で日本が国防や英語コミュニケーションの必要があることを知ったことをきっかけに本格的に英語学習を始めたというのは非常に興味深いと感じた」、「貿易や欧米諸国との交渉のために英語教育が必要になり、西洋の文化も同時に広まった」「私は英語でコミュニケーションをとれるようになるという点では、明治初期に行われていたような直接法で英語を学んだほうが良いと考えます」などの記述から、貿易やコミュニケーションの目的のための英語学習の必要性について再認識していることがわかる。「⑦国際交流」との関連性では、「国際交流のために英語を学ぶのは現在と同じだと気づいた」など、英語学習の目的として国際交流を意識していることも読み取れる。「⑥オランダ通詞」については、「オランダ通詞のことは初めて知ることが多く面白かった」、「英語学習ではオランダ通詞が重要な役割を果たしたことを知った」など、本学所在地である長崎の郷土史に関連する事項であるにも関わらず初めて知った学生が多く、興味関心が高まったものと推察される。最後に、「⑧明治期」についての記述が複数観察され、「自分も今英語を勉強しているが、江戸時代や明治時代の人たちが国のために必死に英語を勉強したことを知って、自分も何か目標を見つけて、英語の勉強に全力を注ぎたいと思った」など、明治初期に見られた日本人の責務としての英語学習と自己の英語学習経験とを照らし合わせることで、動機づけを高めるきっかけとなっていることが見受けられる。

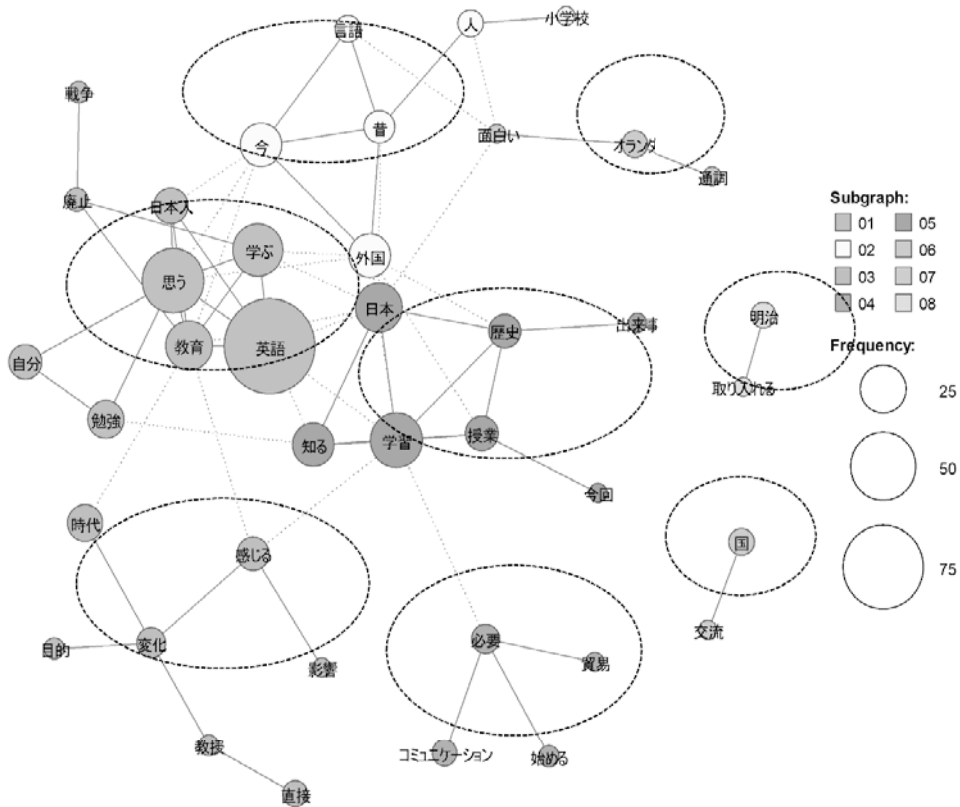


図1 「感想・質問」の共起ネットワーク

3.2.2 「調べたいこと」の共起ネットワーク

次に、図2に示した「調べたいこと」の共起ネットワークに示された特徴的なまとまりを取り上げ、共起ネットワークに現れた具体的な記述内容を文脈の中で解釈する。下線部は共起ネットワークに示されている語を表している。図2が示すように「調べたいこと」の自由記述では6つのカテゴリーが観察できる。各カテゴリーは、「①英語学習・教育」「②日本と世界」「③教授法の変化」「④オランダ」「⑤言語の勉強」「⑥その他」に特徴づけることができる。

まず、「①外国語学習・教育」について見てみよう。ここでは、「英語」「思う」「外国」「学習」「日本人」などがキーワードとなっている。具体例としては、「英語はオランダ語を使いながら学習していたが、オランダ語はどうやって勉強していたのか一番初めのオランダ通詞はどのようにして決められていたのかをもっと深く調べてみたい」、「今日本人が学習すべき外国語だけでなく韓国語などについてもどのような歴史があり日本に伝わってきたのか調べてみたいと思った。英語ができることでこれからの社会で何ができるのかさらに詳しく調べてみようと思う」など、オランダ語

を媒介とした英語学習方法や、未知の言語の学習方法、また韓国語など英語以外の言語が日本に伝来した由来について興味を示していることがわかる。「②日本と世界」では、「日本」「文化」「世界」「伝わる」などがキーワードとなっている。「世界の国々と日本の英語教育の違いについて調べたい」、「英語の必修化がされているとき、世界ではどんな動きがあったのか、日本と世界の関係はどうだったのか、英語教育につながっているのかについて調べたい」などの記述から、日本の英語教育を世界というより広い視野の中に位置づけていることが観察される。「③教授法の変化」については、「直接」「間接」「教授」「変化」などがキーワードとなっている。「直接教授法から間接教授法になって当時の人々の英語力はどう変わったのかを知りたいなと思いました」、「外国人教師から直接学んだ人たちはいったいどれくらい理解できていたのかわからないことがあったらどのようにして伝えていたのかを知りたいなと思いました」、「教授法の変化を通して日本は直接法から間接法になり英語習得能力がどのくらい違うのかに気になった。またなぜ日本は間接法から直接法にまた戻そうとしないのかに気になった」など、自

らが受けてきた英語教育を教授法の違いという観点から振り返り、その違いや効果について興味を抱いていることが読み取れた。「④オランダ」については、「オランダ」「通詞」「由来」「言葉」「興味」がキーワードである。「通詞」という言葉を初めて聞いたのでとても興味がわいています。彼らは英語とオランダ語ともにどのくらいのレベルまではなせるのか、また具体的にどうしながら英語の知識を身に付けたのか気になります」、「英語とオランダ語の深い関係を学ぶことができたのでオランダ語を調べてみたい」、「ラナルド・マクドナルドさんに興味がわきました。もっと詳しく調べてみたいです。オランダ通詞は今日知りましたが、唐通事は何をしていたのか興味がわきました」など、長崎の郷土史とも関係が深いオランダや中国について興味関心が高まったとの言及が多く見ら

れた。「⑤言語の勉強」では、「なぜネパール人や中国人などの外国人が日本語を勉強しているのか調べたい」、「言語が苦手なのでオランダ通詞の勉強内容をもっと知りたいです」、「戦前の英語教育廃止論があったとき、英語教育は必要だと言った少数派の人たちはどんな勉強や活動をしていたのか調べてみたい」などの記述内容から、「勉強」を「学習」とほぼ同義で使用しているものと推察され、学習方法や動機に視点が向けられていることがわかる。最後に、「⑥その他」では、授業を受けてその他のことに興味があったという例が見られた。例えば、「スポーツの広がりなど他にコミュニケーションが必要とされたテーマからも調べたい」など、自分の興味関心に寄せて英語との関連性を見出そうとしたことが読み取れた。

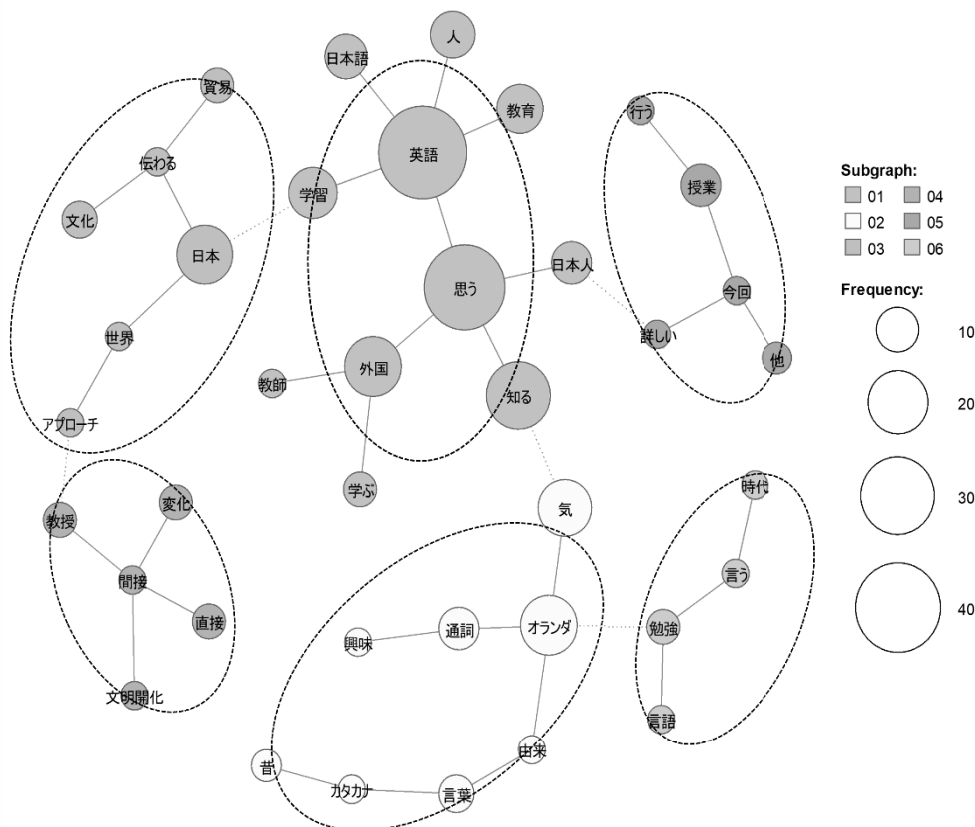


図2 「調べたいこと」共起ネットワーク

4. 考察

まず、選択式アンケートの結果から、学生は今までに英語教育史について学んだ経験が無かったことが明らかになった。しかし授業後は、日本の英語教育史について知ることは英語学習の目的や動機について考えるきっかけとなったと感じてお

り、英語教育史の授業が英語学習の目的意識の向上に一定程度の影響があったことが示唆された。他方、英語教育史の授業を受けた直後の動機づけに変化があったと感じている学生は多くなかった。英語教育史の授業が学生の英語学習動機にどのように働きかけていくのかについては、継続的

な調査が必要である。さらに、学生にどのような学びがあったのかを確認するため、自由記述式アンケートの内容を分析した。頻出語の分析から大きな傾向を捉えた上で、共起ネットワークの分析結果から学生の学びの詳細を考察した。その結果、「感想・質問」のアンケート記述については、「①日本史と学習」「②英語教育」「③教授法の変化」「④今と昔の言語学習」「⑤英語の必要性」「⑥オランダ通詞」「⑦国際交流」「⑧明治期」の8つのまとまりが見られた。このことから、本授業を履修した学生は、英語学習目的や教授法の歴史的変遷を自己の学習経験と照らし合わせ、英語学習の必要性について再認識しており、長崎の郷土史と英語学習の接点についても関心を高めることができていたと要約することができる。また、「自分で調べたいこと」については、「①英語学習・教育」「②日本と世界」「③教授法の変化」「④オランダ」「⑤言語の勉強」「⑥その他」の6つの記述のまとまりが見られた。これらの記述内容から、本授業で英語教育史を学んだ学生は、英語以外の言語への興味関心を高め、日本の英語教育を世界の状況と対比して捉えることができおり、教授法の変化に興味を抱くなど自己の英語学習状況をより客観視するようになったと要約できる。さらに、学習方法や学習目的にも目を向けており、スポーツと英語コミュニケーションとの関係に関心を寄せるなど、授業の枠を超えて英語学習目的を探究しようとしている姿勢が見られた。以上の結果から、本研究対象の学生に関しては、英語教育史の授業が英語学習の動機づけに一定の好意的な影響を与えていると推察することができる。

5. まとめ

本稿では、英語教育史の授業における学生の学びを分析し、英語学習の動機づけへの影響について予備的調査を行った。まず、選択式アンケートにより全体像を捉えた。学びの内容については、テキストマイニングの手法を用いて記述内容を分析することで特徴的な傾向を可視化した。調査の結果、英語教育史の授業は英語学習の目的意識の向上に好意的な影響を与えていることが見受けられた。特に、英語以外の言語や非英語圏への関心を高めるなど、英語をより相対的に捉える機会となったことは注目に値する。さらに、教授法や学習方略にも目を向け、自己の学習を俯瞰してみる姿勢を身に付けるきっかけとなったことも示唆された。また、郷土史やスポーツなどの自己の関心

事項との接点を見つけ出し、英語学習目的を再構築するなどの効果もあることが示された。

すでに8年間以上を英語学習に費やしてきた大学生を対象とした英語教育では、新たな動機づけのアプローチが必要とされていると言えよう。そのためには、英語教材や教授法の工夫に加えて、「なぜ英語を学んでいるのか」という学習者の根本的な疑問を共に考える機会を設けることが必要である。この点において、英語学習の目的意識に着目した英語教育史の授業を取り入れる意義は大きいと考える。しかしながら、本研究は調査対象人数が限られた授業実践研究であることから、英語教育史の授業が動機づけへ与える効果についてはより詳細な調査が必要である。今後は、学生の所属学科による比較や、受講後の英語学習態度の変化などについて明らかにすることを課題としたい。

参考文献

- 伊村元道 (2003) 『日本の英語教育200年』 大修館書店
 斎藤兆史 (2007) 『日本人と英語—もうひとつの英語百年史』 研究社
 樋口耕一・中村康則・周景龍 (2022) 『動かして学ぶ! はじめてのテキストマイニング—フリー・ソフトウェアを用いた自由記述の計量テキスト分析—』 株式会社ナカニシヤ出版

